

AA 研共同研究プロジェクト

『マルセル・モース研究－社会・交換・組合』平成 21 年度第 2 回研究会

日時 2009 年 8 月 9 日（日）午前 10 時より午後 7 時まで

場所 九州大学文学部棟 2 階 72 番比較宗教学研究室

内容

1. 渡辺公三（AA 研共同研究員、立命館大学）

「モース『贈与論』における基本語彙とモース人類学総体との関係」

2. 関一敏（AA 研共同研究員、九州大学）

「モース『呪術の一般理論』における基本語彙とモース人類学総体との関係」

3. 溝口大助（AA 研ジュニア・フェロー）

「モース『死の観念』論文における基本語彙」

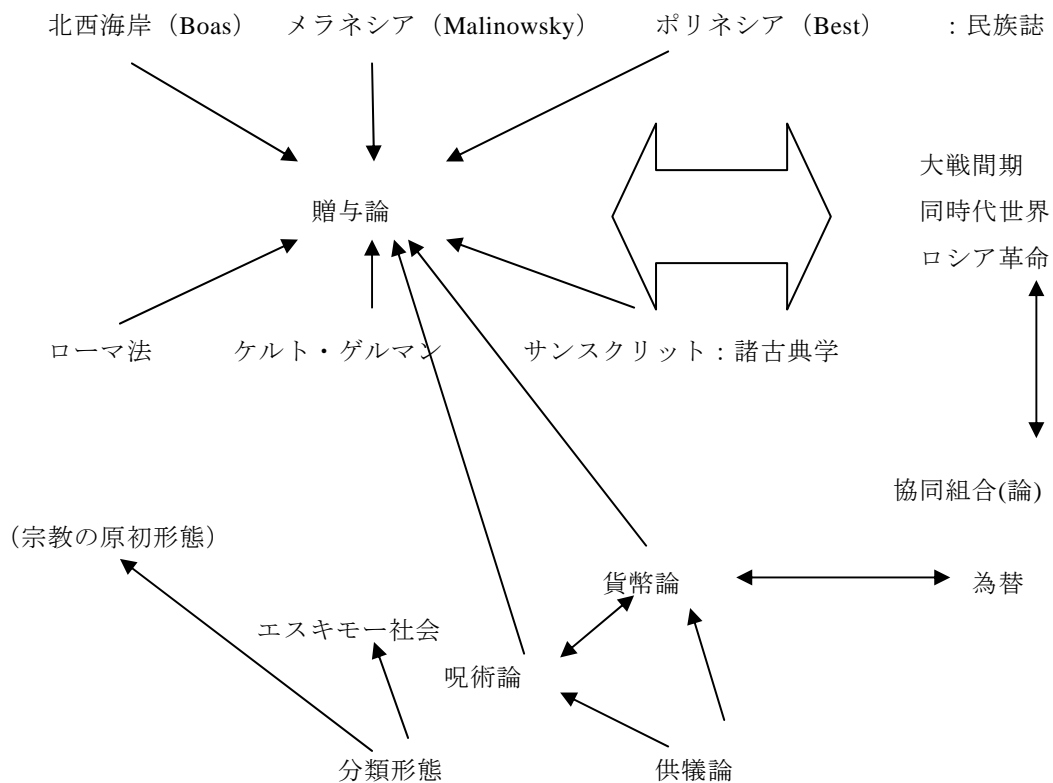
4. 真島一郎（AA 研）

「ナシオン・贈与・交換」

5. 高島淳（AA 研）

「モース『供犠論』における二つの語彙の考察－communion(communiel)と choses sociales」

1.



渡辺報告では、『贈与論』の基本語彙をモースの探究の過程のなかで位置付けるためのパースペクティヴを上記の図で示し説明をくわえた（当日配布したものに若干の修正）。こ

こにはとりたてて目新しい指摘はないが、同時代民族誌と諸古典学と同時代のヨーロッパ世界の動向へのモースの同時的関心のありかたの確認、『供犠論』『分類の未開形態』からの展開の過程の確認はできたと考える。

また、『贈与論』収録の巻の編集方針と関連して同時期の「文明論」の位置づけについて、両大戦間期の社会主義の動向のなかでこの語がどう使われたについてコメントをした。

「文明論」のもつ意義についてとりわけ「Nation」の考察との関係で再考すべき点があることが示唆された。

(渡辺公三)

公三)

2. 関報告では、はじめにモース『呪術の一般理論素描』のテキスト構成をふりかえりながら、基本語彙の問題点が指摘された。とくに、第三章第二節「呪術の要素：行為」でモースが主として論ずるふたつの儀礼様態を、「身ぶりの儀礼／ことばの儀礼」と訳すのか、それとも「手の儀礼／口の儀礼」と訳した方が適切となるのかという、儀礼の身体論にも関連した重要な問題提起がなされた。

つぎに、同テキスト冒頭部分の訳出作業をふまえて、当時の発想における「宗教史研究」の延長としての呪術論が、じっさいは宗教史をこえた次元においてモース人類学総体とのあいだにいかなる関係をもっていたかの検討がなされた。そのさいに提示された論点のいくつかは、本研究会における後続の溝口報告、高島報告においても、出席者一同に共有された問題提起としてあらためて言及され、各自の見解が示された。

(真島一郎)

3. 溝口報告では、『集合体により暗示された死の観念の個人における肉体的効果』（以下、『死の観念』。《Effet physique chez l'individu de l'idée de mort suggérée par la collectivité (AUSTRALIE, NOUVELLE-ZÉLANDE)》）論文の訳稿が呈示された。これに対しては、モース思想を理解する上で極めて重要な以下三点のコメントがなされた。

(1) 1926年に『正常および病理学的心理学紀要 (Journal de Psychologie Normale et Pathologique)』に掲載された『死の観念』論文は、モースが同紀要にて1924年に掲載した論文『心理学と社会学の現実的でしかも実践的な関係』（以下、『心理学と社会学』《Rapports réels et pratiques de la psychologie et de la sociologie》）と次の点で共通性をもつことが指摘された。第一に、これら二論文が心理学会 (Société de Psychologie) の心理学者たちに差し向けられていた点、第二に、「全体的人間 (l'homme total)」を主張するために執筆された点、である。モースは、この二論文の共通性を前提としつつ、一方で、『心理学と社会学』論文において、身体的・生理学的なもの、心理学的なもの、そして社会的なものとの合流する繋留点としての「期待 (attente)」という現象を検討し、他方で、『死の観念』論文において、同じ繋留点として「絶望 (désespoir)」や「悲嘆 (lamentation)」という対照的な現象を吟味していたことが指摘された。

(2) 以上の点を念頭に置くとき、報告者により「道徳的な」と訳出された”moral”は、「身体的な」を意味する”physique”としばしば文脈上対比的に並置されているだけに、「精神的な」と訳出されるべきであったことがあわせて指摘された。そもそも”mental”（「精神的な」）や”psychologique”（「心理学的な」）が、”moral”以上の頻度で”physique”と対置されていたことを認めた報告者は、”mental”こそを「精神的な」に訳し分けるべきだと判断し

ていた。しかし、『死の観念』論文では、”moral“が社会的圧力のもとでの「精神」を意味するゆえに、そこに「精神的な」という訳を割り当てたほうが適切であるという指摘、また訳出を固定せずに文脈に応じて訳し分ける必要があるという指摘を受けた。

(3) 1920年代の心理学と生理学における学術的あるいは一般的な語彙の用法に配慮して、訳出および訳注に注意を払う必要がある点が指摘された。たとえば、フロイトの精神分析学から距離を置いていたモースが、とりわけピエール・ジャネの心理学の影響下にあったことを踏まえるとき、精神分析学の一般的語用とは離れて、“subconscient”（「下意識」）や”inconscient”（「無意識」）などの語彙が訳される必要があるという重要な指摘がなされた。とくに1927年の論文『社会学の外延をめぐる方法の注記』（《Note de méthode sur l'extension de la sociologie》）論文が、1924年の『社会学と心理学』論文および1926年の『死の観念』論文の延長上にあるだけでなく、心理学の方法論をめぐる議論をさらに発展させていることが紹介された。

以上の三点の主な指摘を踏まえて、報告者は、訳出上の注意点、訳注の工夫、時代的な学術上の時代背景、とくに心理学、宗教学、生理学、そして社会学との繋留点に細心の注意を払いながら上記の課題を遂行する必要があるとの理解を得た。（溝口大助）

4. 真島報告では、前回研究会が予定時間をオーバーしたため研究代表としての立場から報告内容を一部割愛していた前回報告「二様の社会結合を架橋する共示作用の特異性について」の補足的発表を、主にシュンペーター『租税国家の危機』と贈与論の問題構制との連関という観点から行った。直接の考察対象にあたるモース「ナシオン」論文の語彙チェックについては、前回からさらに進展した部分をあわせて出席者一同にリスト形式で公表した。また、AA 研所蔵資料として目下一括購入が検討されている、フランスの研究者集団 MAUSS の刊行物についての資料紹介を試みた。（真島一郎）

5. 高島は『供犠論』の解釈と翻訳において重要な位置を占める二つの語彙についての考察を行った。

まず、**communion** であるが、供犠について用いられる場合には基本的な用法がフランス語自体によるものではなく、ロバートソン・スミスの英語の用法を基本としており、「分かち合う」「共食の」供犠を意味するために、**communion alimentaire** というような言葉を発明したりしている。これはフランス語の **communion** が「聖体拝受」の場合の他には精神的な連帯のみを意味し、物質的な「分かち合い」という意味を有していないからである。しかしながら、「神の供犠」という神自身が犠牲となるタイプの供犠を論ずる章においては、聖体拝受のイメージを強く残し、「聖餐の供犠」と訳することが適当と思える文脈が増えるのが見られることを指摘した。

ついで **choses sociales** については、おそらく『供犠論』において、モースによる最初の定式的文章が見られ、「親密に入り込んだり、離別したり、内在性と超越性というこの性格は、まさに最高度の、社会的諸物の特徴である。社会的諸物もまた、人の視点次第で、同時に個人の内部と外部に存在している。」と述べられている。ここで強調されているのは神のような唯物論的立場からは観念的想像的なものにすぎない存在が、個人によって信じられているということだけで十分にリアルな存在であって、「物」と呼んでよいほどの

実在性を持っているということである。そうしたものとして、神などの聖なる諸物は供犠のような儀礼の場において、力あるリアルな存在として立ち現れ、効果的に振るまう。また、人間の側も効果的に儀礼を行う。一見同じ用語を用いながらデュルケーム的な用法との食い違いについて十分な意識化が必要であり、とりあえず「社会的諸物」という異化効果を期待できる訳語を提案した。この提案については、『贈与論』などにおいても統一的な訳語の使用が可能かについて検討してみると渡辺から応答があった。 (高島淳)